

## 論文の内容の要旨

### 台湾における左官装飾の変遷(1860~2010)

#### ---材料・技芸・職人---

葉俊麟

本論で言う「左官装飾技芸」とは、左官装飾の基礎工事に関する細部装飾全般を指すが、明末期と清朝時代に福建と広東地域から台湾へ伝わった剪粘（せんねん）、交趾焼、泥塑（でいそ）、日本統治時代に日本から伝わった人造石塗、左官彫刻、鏝絵なども含むものとする。左官装飾技芸は台湾建築に応用され、多様な組み合わせによる台湾特有の建築を形成した。日本統治時代に大量の公共建築が建設され、この時に台湾の左官職人と剪粘職人のうち技術のある者たちが、当時日本で流行していた左官装飾技芸に学び、これを模倣する形で取り入れた。

本研究で主に扱ったのは、「技芸（美術工芸にかかる技術）」であるが、適宜「職人（職別と伝承）」と「材料（作品）」を加えて比較検証することによって、台湾左官装飾技芸やその材料の転変に関する歴史的展開の過程が明らかになる。本論文の研究成果において、下文では職人、技芸、材料、文化財保存に分けて論述する。

まず、職人の視点から台湾左官装飾職人の変遷をみる。台湾は移民社会に属しており、各民族は中国での故郷の風俗、習慣を移入した。住居建設においても、故郷の職人（匠）を台湾に招聘し、故郷での建築に似せるように計画とレイアウトを行っていき、台湾での多元建築の風格が形成されていったのである。日本統治時代大正から昭和初期にかけて、台湾の経済は中国に比べて豊かになり、寺院家屋の改修が盛んに行われ、多くの優秀な中国（唐山）職人が台湾に招聘されて住宅や寺院等の修築工事にあたった。中国から招聘された職人も台湾地元の職人も共に優れた技能を発揮し、この時期に多くの優秀な人材が輩出された。

日本統治時代初期、政府は大挙して家屋、神社等の建築を行った。その際、日本からの建築職人だけでなく、台湾本土の職人も建設に関わった。この「雇用参与」の関係により、台湾本土の職人は間接的に訓練されることになった。建築の過程で、台湾の左官職人達が衝撃を受けたのは、建築用語と様式上の差異よりも、日本の新技術（人造石技術など）と伝統技芸（漆喰、鏝絵など）に

対してであった。こうして、日本人職人との間に技術伝承のルートが開かれ、民間の工程において、輝かしい発展を続けた。

1949年に中華民国の国民政府は台湾に場所を移した後、中国大陸との航路が切断された事で、中国大陸から再び優秀な職人を呼ぶ事はできなかった。そのため再建工事はちょうど青壮年期にあった台湾の職人達に大きなチャンスをもたらした。1996年に中国で発生した文化大革命により、中国人は海外に交流赴任することや、また仕事面でも共に厳しい制限を受けた。アジアの華人区の中国式建築で修復工事を行う際、中国からの職人（匠）を招聘しにくくなった為、台湾の職人に転向して招聘し、海外の寺院を修築することになった。その為、台湾本土の職人達は海外において素晴らしい才能を現す機会が与えられることとなった。例えば1960年他に弟子を引き連れて来た朱朝鳳は、日本の那智山奥の院を建築し、弟子を引き連れて来た陳天乞は、日本長崎の孔子廟院を建築した。台湾の職人は海外で寺院楼閣を築き、多くの工芸の佳作品が残っている、その事が潜在的に台湾での寺院を建てる技術の普及と交流を広めることになったのである。

技芸と材料の観点から言えば、本研究で明らかにしたことは以下の通りである。

①台湾左官装飾の技芸と材料を解明した。本研究は、今後、台湾の伝統建築研究はもとより、寺院や文化財の保存修復の際に、左官装飾作品の材料や年代や特徴などを判別する上で貢献するものとする。

②左官装飾は「形式と作法」から「土糊（鏝絵/泥塑）、人造石塗、剪粘、交趾焼」の四類型に分類することが出来る。

③台湾伝統的な左官装飾工具（剪粘、交趾焼、人造石塗などの道具）と左官装飾工程図説を発掘した。年老いた職人の慣用道具と左官装飾工程図説の収集の急迫。例えば、日本統治時代剪粘職人陳三火が日本工官工から工官工具一式を貰った。

④現代左官装飾技芸の創新と新材料の試み。陳三火の例をとって、陳三火の剪粘芸術における超越と大胆な創新は、伝統に新たな意味を立てた最良の模範である。麻豆鎮文化館での初個人展では、民衆と芸術文化関係者の視野を広げて剪粘を再認識させ、次第に芸術界を驚かせるようになり、伝統建築職人から現代芸術家へと転身する。

⑤台湾寺院の重要な左官装飾作品の発見と記録を行った。例えば、新竹新埔廣和宮の交趾焼、嘉義東石港口宮の剪粘と交趾焼、両者とも文化資産保存の価値である。

台湾の気候は多雨多湿で台風の襲来も年に数回あり、屋根上の剪粘と鏝絵は

時間と共に劣化して原型を失い、元通りに修復するのは非常に困難である。それで、台湾廟宇の修繕工事の際、多くの建材や文物が、故意にしろそうでないにしろ行き過ぎた修繕をされるか不当に取引され売却されている。筆者の多年に渡るフィールド調査で作品を尋ね、重要作品の保存や道具の収集など、緊急の修復に向けた提案は下記の通りである。

- ①重要職人作品を迅速に調査し管制や保管を行う必要がある。
- ②屋根上の剪粘と鏝絵作品の画像記録を作成する必要がある。
- ③年老いた職人の慣用道具と左官装飾工程図説が収集の急迫した課題である。

研究限界において、現在、高齢となった職人達の技芸を継承する者は絶え、多くの優れた作品も廟宇の改築によってほとんどが破壊されたために、完全な形で50年以上保存されているもの（特に剪粘又は鏝絵）は稀な例となっている。左官装飾作品と伝統左官装飾技芸の消失は我々の考えているよりもずっと速く進行しておる。そうした場合には、このケース・スタディの限界性をできる限り記録調査すべく。

以上より、本論文は、台湾文化財における左官装飾の修復工事に関する基礎研究を確立した。この研究成果の積み重ねが、今後の技芸保存や文化財修復の基礎資料となることを切に願っている。